特別寄稿

日本中世思想史への歩み

大隅和雄

丸山眞男文庫の元顧問・大隅和雄先生は二〇一七年一月に『中世の声と文字―親鸞の手紙と「平家物語」』を公刊されました（集英社新書）。文庫では同二月に関係者が集り、著者から同書の執筆背景を中心にヒアリングの機会をえました。その内容は「決戦体制」期の中等教育の実態を伝えるなど資料的価値に富み、また戦後日本で中世思想史研究がたどった軌跡を考察する上でも示唆に富みます。広く公開されることがふさわしいと考えて、本『センター報告』に載せることにいたしました。掲載に同意され、清書原稿を作って下さった大隅先生に謝意を表します。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長　和田博文

私は、一九四五年三月、福岡市の福岡第一師範学校男子部附属国民学校を卒業して、広島高等師範学校附属中学校特別科学教育学級という所に入学しました。戦争のために必要な科学者を養成するための特別学級が、東京、広島、金沢の高等師範の附属中学校に開設されたのです。もう敗色覆い難い時期ですからまさに泥縄です。広島は、大阪以西の西日本各地から生徒を集めて入試を行いました。東京は、附属中学校の生徒の中から希望者を募って科学学級を編成しました。三つの中では広島が一番本気で熱心だったようです。

三日に亘る入学試験は、国民学校の課程にはないことを、受験生に授業して、その応用問題を出したり、器具を並べて実験をさせたりするというような、かなり工夫を凝らしたもので、学級は三五人でした。二、三、四年生は各地の中学校から推薦で入れたようですが、工場や農村への勤労動員がなく、勉強できるので希望者が多かったようです。

私も、ここに入れば戦争に行かなくても、お国のために働けると思って、主要都市の爆撃が激しくなる中、広島の学校に入るのに反対する両親を説得して、科学学級に入りました。戦時下、劣悪な食糧事情に耐えての寮生活は、辛いものでしたが、教育は充実したものでした。同じ中学校で、正規学級の生徒は勤労奉仕に動員されていましたが、

科学学級は数学・物象・化学・生物に特化された時間割で、教室では実験が多く、計器や測定機械の使い方を教え込まれました。顕微鏡はかなり上等のものを、各自一台ずつ使うことができ、実験の器具や材料も種々不足なく揃っていました。

時々、文理大、高師の先生の授業があり、中学の先生とは違う、広く深い世界に触れたような気がして楽しかったのが忘れられません。学校が学校でなくなっていた当時の日本で、極めて変則的な科学学級だけに、学校らしきものが残っていたのだと思います。修身、国語、歴史、体操、教練は各週一時間、英語は三時間、あとは数学、物象、化学、生物ばかり、一日八コマ、日曜も隔週に授業があるという詰め込み教育でしたが、ベテランの先生の熱心な授業は面白く、生徒もみんな真面目でした。福岡市では、市内電車は中学二年生、郊外電車は三年生が運転していた時代です。

中部軍司令部は、中等学校の生徒は国防要員であるとして、中学校、高等女学校、実業学校の疎開を認めていませんでした。しかし学校が軍と交渉を重ねて、科学学級は七月九日に、比婆郡東城町に疎開し、生徒は動員されて都市部に行っている東城女学校の校舎で授業を続けることになりました。広島では、八月六日の朝、中等学校の一年生がみんな広場に集まり、その日の勤労奉仕に出かけようとしていた時に原子爆弾が落とされました。高師の附属中学は、正規学級も疎開していたので、被爆を免れました。附中の私の学年は、広島市の他の中等学校に対して、学年の同窓会を開くことを自粛して、卒業三〇年に初めて同窓会を開き、疎開を強行した学校に対して謝恩碑を建てました。今でも附中の生徒だけが生き残ったことに、拘りを捨てきれずにいます。

敗戦の日、私たちは東城女学校の教室で、蛙の解剖をやっていました。よく聞こえない玉音放送を聞いて、日本は無条件降伏をしたのだと先生から告げられました。物象の先生が教室で、こんな状態で戦争に勝てるはずがないというのを聞いていた私たちは、驚きませんでしたが、負けたらどうなるのかについて、考える能力を全く持っていなくて、アメリカ軍が来たらどう逃げるかなどと話すことしかできませんでした。生徒の食料を確保するのが困難なので、親の所に帰ることができる者は、とりあえず帰れということになり、八月二〇日過ぎに、私は山陰線を通って、三日もかかって福岡に帰りました。

福岡で学校からの連絡を待ちましたが、連絡はなく、自由な二か月を過ごした末、福岡の国民学校の友達が沢山いる、修猷館という中学校に編入学しました。学校は空襲は免れていましたが、予科練や陸士、海兵から戻ってきた上級生の暴力と、満洲などから引き上げてきた編入生で、増クラスになり、荒れすさんだ気分に覆われていました。

二年生になった頃、館長が朝礼で、戦後の新しい中学校を創るために、学校図書館を作りたい。戦災に逢わなかった家の生徒は親と相談して、家にある本の中で生徒の為になる本を一冊でいいから学校に寄付して欲しい。それを基に図書館を作ろうという話をしました。館長は旧制福岡高等学校の教授だった英文学者でした。学校は戦時下に揃

えていた本を、軍国教育の記録とともに、校庭の隅に掘った穴で焼き捨てていたのです。

結構沢山の本が集まり、学校は、その本の整理と閲覧貸出などを全部生徒にやらせるために、図書部というクラブを作りました。私は、国語の先生だった岡田武彦先生（後に九大教授。陽明学の研究者）の推薦で図書部員になり、同学年の部員に気の合う友達を誘って居心地のいい場所を作りました。四年生が中心になり、山のような本を、『日本十進分類』という本を見ながら分類し、三段ラベルに番号を記して、カードを作り、高校卒業まで、司書のまねごとのような仕事をしました。

寄付で集まった本は、学校図書館の本としては不揃いでした。戦中戦後に出た本は、紙も悪く造本も粗末で、数人が読むと壊れてしまうので、本を増やそうとすると、古本を買うことになります。今考えると信じられないような気がしますが、古本屋を回って本を買うことを、学校が図書部の生徒に任せたのです。四年生を中心に、今日の放課後に古本屋を回りたいと云うと、事務室で千円か二千円渡してくれ、擦り減った下駄をはいて福岡の街を歩きました。預かったお金は後援会のお金だったのだと思います。

福岡市中の古本屋と顔見知りになりましたが、あの頃は戦前に持っていた蔵書を、自宅の前に本棚を出して売っている人も珍しくなかったので、そんな噂も逃さずにあちこち歩きました。一九五〇年頃まで、古本は安かったのです。ゲーテ全集（改造社）、三段組みの現代日本文学全集（改造社）など、纏まったものは先生に相談しましたが、単行本を買うのは生徒の自由で、領収証を事務室に出せば済み、よく学校が生徒に任せたものだと思います。

どんな本を買うかは、河合栄治郎編「学生叢書」（日本評論社）の『学生と読書』巻末のリスト、『教養文献解題』（社会思想研究会）などを諳んじるほど見て、先輩の旧制高校生から聞いたり、本の相談にのってもらえる先生の話を聞き、古本屋の店主とも話しましたが、西哲叢書（弘文堂）、創元選書、創元科学選書などはみんな揃えるように努力しました。戦後間もない頃のことですから、戦時中に出た本を敬遠して、集めた「良書」は今考えると、大正後期から昭和初期の、大正教養主義の本だったのです。丸山文庫の本棚を眺めると、読んでもよく分らないのに、私たちが古本屋を回って一生懸命探した、懐かしい本が揃っています。最近、飯田泰三さんの『大正知識人の思想風景』（法政大学出版会）を読んで、私自身の知識の系譜について、改めていろいろなことを知ることができました。

学校がかねて約束していた闇屋が、試験に間に合うように紙を持ってこなかったので、期末試験は当分延期という時代に、戦前の文学や哲学の本を乱読している間に、科学学級に較べてお粗末な、理科の授業に興味を失って行きました。寺田寅彦全集の何冊かを読んで、文学の分る科学者になりたいと思い、ロシア文学に興味を持って、プーシキン全集を読み、『戦争と平和』や『ジャン・クリストフ』に心を奪われていましたが、国史教科書の墨塗りがきっかけで、歴史学に関心を

持って、学生叢書の『学生と歴史』を繰り返し読んで、大学に入って歴史を学びたいと思うようになりました。

私は、敗戦の年の三月に国民学校を卒業したので、日本中心主義、軍国主義教育の最終段階の教育を受けた学年です。教科書の『国史』は暗誦できました。中学校の国史の教科書に墨を塗った時、一体こんな教科書を書いたのはどんな人なのかと思いました。細かく指定されて消して行くと、残った文章はもう意味が通じない。新聞には羽仁五郎が連載で、暴君雄略天皇や壬申の乱のことを書いていました。そんなことは『国史』には全く出てこなかった。それで、一体歴史を書くというのはどういうことなのかと思いました。

学生叢書の『学生と歴史』は、一九四〇年の刊行で、津田左右吉の「日本歴史の特性」が掲載できなくなって、その分ページがとんでいる本ですが、歴史学について主な所は新カント派の理論が説かれています。それを読んで一九五一年に大学に入って、駒場歴研に入ったら、ヴィンデルバンドやリッケルトなどと云っても全く通じない。高校の時共産党に入っていたという東京出身の友達は、『資本論』第二四章、『ドイツ農民闘争』の話ばかりして、それが歴史の勉強だというので、呆然自失です。

駒場歴研のチューターで来た、永原慶二さんや網野善彦さんに、いろいろ質問しても答えてくれない。そんな時、駒場歴研が企画した講演会にきた、西郷信綱さんの話に強い興味を持ちました。当時、歴史社会学派といわれていた国文学者は、マルクス主義に拠って、日本文学史を考えようとして、国文学は、古典の「歴史的研究」に始まると主張していました。その年の秋に出た西郷さんの『日本古代文学史』（岩波全書旧版）を夢中で読んで、読み終った時駒場寮の窓が明るくなっていたのが忘れられない思い出です。あの頃、歴史学研究会と日本文学協会は、事務所が神田の同じ部屋にあり、密接な関係にありました。

『資本論』や『共産党宣言』を迂回して、西郷さんの、『万葉集』や『源氏物語』についての論を読む中で、マルクス主義を理解しようとしたのです。『源氏物語』や『紫式部日記』のことなど知らない歴研の友達と、対等に話ができるような気がしました。その後、西郷さんは、『詩の発生』（一九六〇年）以後、『日本古代文学史　改稿版』（一九六三年）、『増補　詩の発生』（一九六四年）と、マルクス主義から離れましたが、私は勝手に西郷門下と自称し、国史と国文の間で、暮らして来ました。

駒場から国史学科に進学しました。文学部を出て、銀行などに就職する人が出て来たのは、私より五、六年あとになってからで、文学部に会社の求人などなかった頃ですから、文学部に行くのは、出家するような気分でした。それでも戦後歴史学が高揚していた時代で、左翼学生に人気のあった仏文についで、国史、西洋史は志望者の多い学科でした。しかし、入って見ると国史学科の居心地はよくありませんでした。史料の読み方と実証の手続きしか教えてくれない。歴史を書くというのはどういうことなのか、どういう方法によれば書くことがで

きるのか、そんなことは、全く問題にしようがない。

主任教授の坂本太郎先生が、あるとき新制の人は脱俗の精神が足りないから、学問に向いていないと云った。何かというと、デモに行く話ばかりしている学生を叱る心算だったのでしょうが、分らずやの先生だと思いました。とにかく、新制の学生はバカにされていたのです。歴研でも、東大歴研から新東歴研（新制東大歴研）は差別されていました。私は年をとるにつれて、自分が国民学校の頃戦時下の教育によって、いかに抑圧されていたかに思い当たるようになりました。私にとって敗戦後は専らその抑圧からの解放というわけですから、脱俗の精神には馴染まない。結局、解放ばかり目指していて、収斂するところがないままの一生だったなあと思いながら、坂本先生を思い出します。

山口昌男君と、国史学科は面白くないという話をし、特別研究生の田原嗣郎さんが、話を聞いてくれるようになりました。田原さんの話を聞いて、一九五三年の丸山眞男先生の講義を聞き、『日本政治思想史研究』を読みましたが、国史では中世史の仲間に入っていて、思想や文学に関することをやりたいと思っていたので、卒論は、『方丈記』の異本の比較を手掛かりに、遁世思想について書きました。日本的な無常観や遁世思想から脱却しなければと考えていたのですが、その後、西行、鴨長明、無住と、政治に無縁の人間に関わってきました。慈円も、若い時に遁世に憧れたことで、世間を対象化する眼を持てたのだと考えたりしました。

山口君は国史から脱出して、人類学に行きましたが、私は、思想史、文学史、文化史とか言いながら、国史から抜けることができず、日本史の教員で暮らしてきましたが、学生の時から、西郷さんが亡くなるまで、札幌にいた時を除いて、毎月の読書会に出て、いろいろな本を読み、西郷流の学問論の輪に入っていました。

「歴史と文学のあいだ」で、日本中世のことを考えてきたわけですが、中世といえば仏教が問題になります。母方の祖父が、浄土真宗の寺の生れだったので、親鸞、蓮如には関心を持っていましたから、日本仏教史研究会という研究会に出ていました。研究会は、印度哲学の日本仏教の人たちと、国史の日本仏教史の先輩たちとで成り立っていましたが、使い走りの私は、印哲の人から、国史の連中は経典論疏も読まずに仏教を論じているという非難を聞き、国史の人からは、印哲の連中は古文書も読まないで仏教史を論じていると話を聞かされ、どうしたら両方に通じる日本仏教思想史が書けるかと考えてきました。

私は日本仏教の思想史を考えたいと思ったのですが、日本仏教史は、宗派の歴史を並列するだけで、日本仏教の通史になっていないと思っています。明治時代に宗門でない仏教を考えようとして、「通仏教」ということばを使い、根本仏教、原始仏教に始まる仏教の歴史を考えていましたが、国立大学の印度哲学科はそうなっても、仏教の大学が宗派別に設立されたので、宗門の祖師の伝記と教説、宗派の歴史が、仏教史になりました。

日本仏教史の研究は、宗派史に別れていて、宗派の比較研究はあり

ません。私が、仮に親鸞についての研究を発表すると、私は浄土真宗史の研究者とされてしまって、他宗について何か云うことは難しくなります。学生の頃から、宗派史の並列は仏教史ではないと主張してきましたが、後になって、史料の性格、残存の在り方が、宗派ごとに違っていて、簡単に比較などできないということが分り、四〇歳を越える頃から、宗派別の仏教史でも仕方ないと思うようになりました。駒沢大学では真宗のことは視野に入らない、龍谷大学では禅宗のことは何も話題にしないという状態です。

どうしたらこの状態から出られるか。私は、宗派に属さなかった無住のことを考えれば、宗派別でない研究ができるだろうと考えました。『沙石集』に関する国文学の説話文学からではない、戦後の無住研究のハシリになったと思っています。没落武士の家に生れた無住は、東国で広く各宗の教説を学びましたが、どの宗派にも属することなく尾張の寺で民間説教師として過ごしました。『沙石集』『雑談集』『聖財集』という本を書いたのですが、日本仏教史は宗派の並列ですから、無住の居場所はありません。

無住は、庶民の間では、様々な信仰が棲み分け、共存して平和が保たれているので、一宗の教えに固執して、他宗を否定するのは、人間の思い上がりだと云っています。選択専修が鎌倉時代の新しい仏教の在り方だとする、鎌倉仏教論とは違うのです。庶民の間で仏法を説き続けた無住の主張はそれに反対だったわけです。

仏教ということばは、仏の教えを書いたお経のことで、例えば『愚管抄』の中に「仏教」ということばは一度も出て来ません。仏教に曰くといえば、お経にこう云っているという意味です。仏教を読み仏法を信じて仏道に入るということになります。明治時代になって大学で、日本仏法史が開講されるようになりましたが、明治時代中期から日本仏教史というようになりました。

宗教ということばもありましたが、宗派の教義の意味で、今我々が使っている宗教ということばは、英語やドイツ語の翻訳語です。条約改正の中で宗教ということばが使われるようになり、基督教、回教と並べて、仏法ということばで考えていたものを仏教というようになりました。ですから、宗教ということばは、広く日本人の間でまだ日本語になっていません。新宗教の信者の聞き取りをしていてそう思うことが度々です。習俗か宗教かが議論されても深まらないのは、宗教ということばが日本語になっていないからです。

四〇年前に笠原一男氏に誘われて、立正佼成会の教団史編纂に参加し、『立正佼成会史』七巻が出来たあとも、教団史研究会に参加しています。日本人にとって宗教ではなく、信心がどんなあり方をしているのかを考えたいと思っていますが、方法は模索中です。宗教の形になって教団ができる前の段階の、人々の信心の在り方に興味があり、何とかしてそれを明らかにしたいと思っていますが、残された時間ではもう無理のようです。